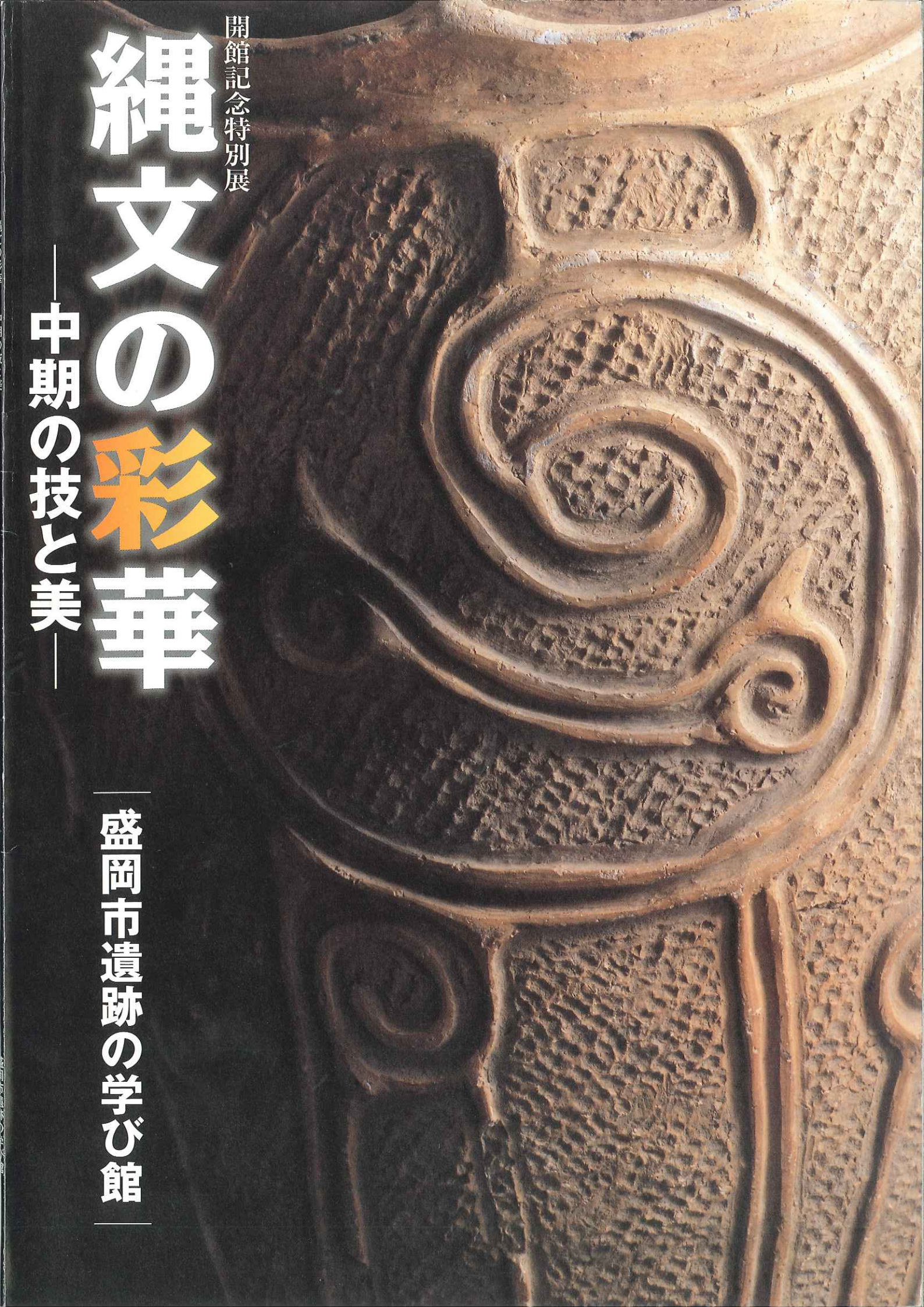


開館記念特別展

縄文の彩華

— 中期の技と美 —

— 盛岡市遺跡の学び館 —



目次

ごあいさつ

凡例

装飾美の高揚－大木式土器－	1
道具と技術	11
祈りの造形	19
解説	23
図版解説	29
展示資料一覧	36
協力者一覧	38
主要参考文献	38

会期／平成16年6月1日(火)～7月4日(日)

会場／盛岡市遺跡の学び館 企画展示室

主催／盛岡市遺跡の学び館

後援／岩手考古学会 岩手史学会 岩手日報社

朝日新聞盛岡支局 読売新聞盛岡支局

毎日新聞盛岡支局 河北新報社盛岡支社

日本経済新聞社盛岡支局 産業経済新聞社盛岡支局

時事通信社盛岡支局 共同通信社盛岡支局

IBC岩手放送 NHK盛岡放送局 テレビ岩手

デーリー東北新聞社盛岡支局 めんこいテレビ

盛岡タイムス社 岩手朝日テレビ

岩手ケーブルテレビジョン エフエム岩手

ラヂオ盛岡 月刊アキュート マ・シェリ 情報紙遊悠

■開館記念特別講演会

講師／明治大学文学部助教授 阿部芳郎氏

演題／「縄文のくらしと社会」

日時／平成16年6月6日(日) 13:30～15:30

会場／都南公民館 小ホール

凡例

- (1) 本書は、平成16年6月1日(火)から7月4日(日)まで開催する「縄文の彩華－中期の技と美－」の図録である。
- (2) 番号は、題箋の番号および展示資料一覧の番号と共通する。ただし、陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- (3) 図版に付したデータは原則として、番号、名称、指定、出土地、所蔵先(当館蔵については省略)、時代・時期、法量の順で記した。
解説に付したデータは原則として、番号、名称、指定(◎=重要文化財)、出土地、法量、時代・時期、所蔵先の順で記した。
- (4) 所蔵先の敬称等は省略させていただいた。
- (5) 時代・時期区分の年代は次のとおりである。
縄文時代 草創期 B.C. 12000～9500
早期 B.C. 9500～6000
前期 B.C. 6000～5000
中期 B.C. 5000～4000
後期 B.C. 4000～3000
晩期 B.C. 3000～2300
- (6) この図録は、盛岡市教育委員会文化課千田和文、神原雄一郎および当館職員今野公顕、佐々木亮二の協力を得て、佐々木紀子が編集した。
- (7) 解説中の名称・語彙等は、筆者の意を尊重し他の部分との統一はとっていない。
- (8) 展示品の写真は、当館職員三浦陽一ほかが撮影した。

装飾美の高揚 —大木式土器—

約1万年にわたって続いた縄文時代は、土器の器形や文様装飾によって、大きく草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6つの時期に区分されます。最初は単調な文様の土器に始まり、数千年の時を経て芸術的な意匠を持つ土器が作られるようになります。

縄文時代中期には、土器は大形化し、造形的にも優れたものが多く作られるようになり、縄文土器の隆盛期を迎えます。「炎」をイメージさせる力強い土器などが東日本各地で競うように作られ、北から円筒式土器文化圏・大木式土器文化圏・火炎土器文化圏・加曾利式土器文化圏といった、地域を特色づける強い個性を持った土器文化圏が発達します。

盛岡市は、大木式土器文化圏の北辺に該当し、大木8a式段階では円筒式土器やその影響を受けた折衷土器が見られます。しかし、次の8b式段階になると円筒式の影は一切見られなくなり、流麗な曲線で大胆に描かれた渦巻文を特徴とする土器文化が繁栄を極めます。市内では、重要文化財に指定されている繋遺跡出土深鉢をはじめ、大館町遺跡、柿ノ木平遺跡、山王山遺跡、上米内遺跡からの出土例があり、当時の多様な造形美をうかがい知ることができます。



土器文化のひろがり



1 | 深鉢 重要文化財
岩手県盛岡市繋V遺跡
大木8b式／高46.5cm



2 | 深鉢 重要文化財
岩手県盛岡市繫^{つなぎ}V遺跡
大木8b式／高36.5cm



3 | 深鉢 重要文化財
岩手県盛岡市繫^{つなぎ}V遺跡
大木8b式／高43.6cm



4 | キャリパー形深鉢
岩手県盛岡市大館町^{おほだてちょう}遺跡
大木8b式／高93.0cm
(常設展示)



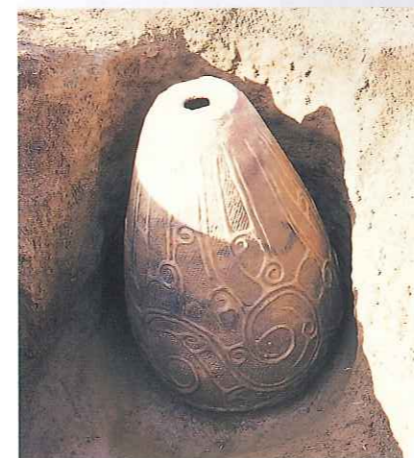
8 | キャリパー形深鉢
 岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡
 大木8b式／高72.0cm



9 | 深鉢
 岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡
 大木8b式／高61.5cm



10 | 深鉢
 岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡
 大木8b式／高54.0cm

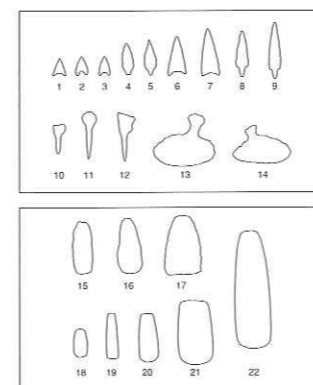
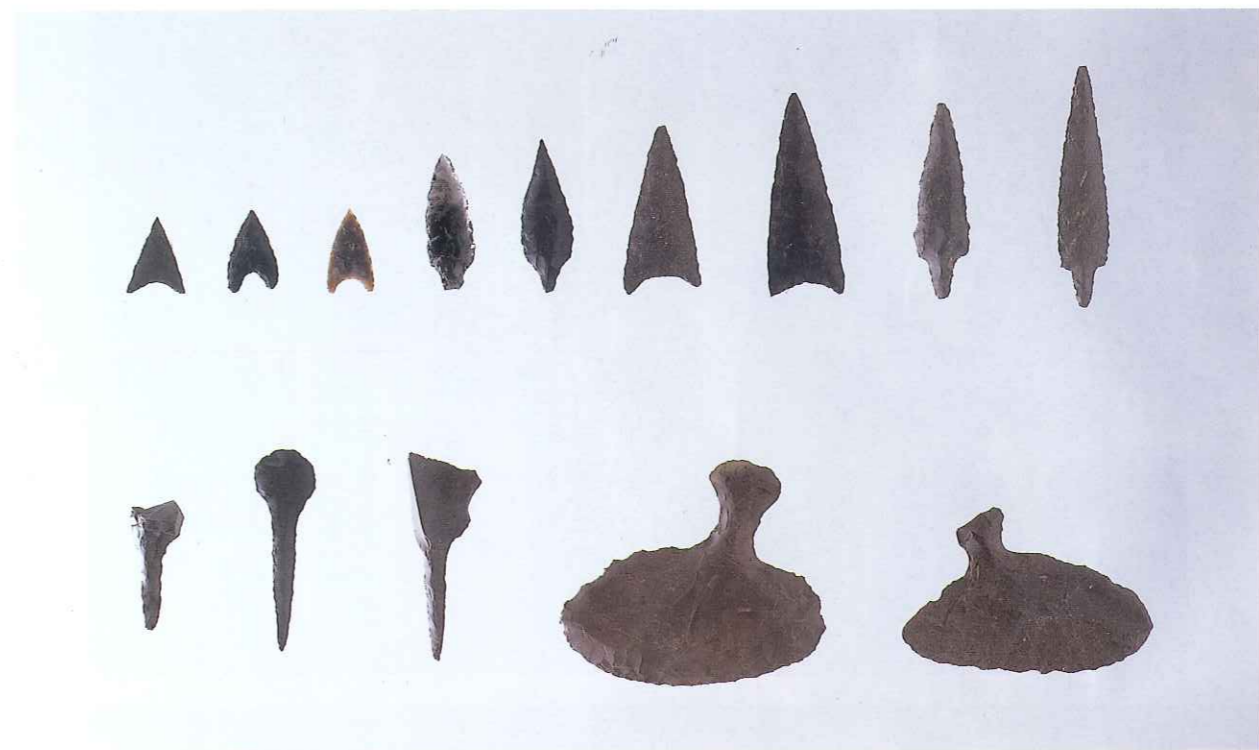
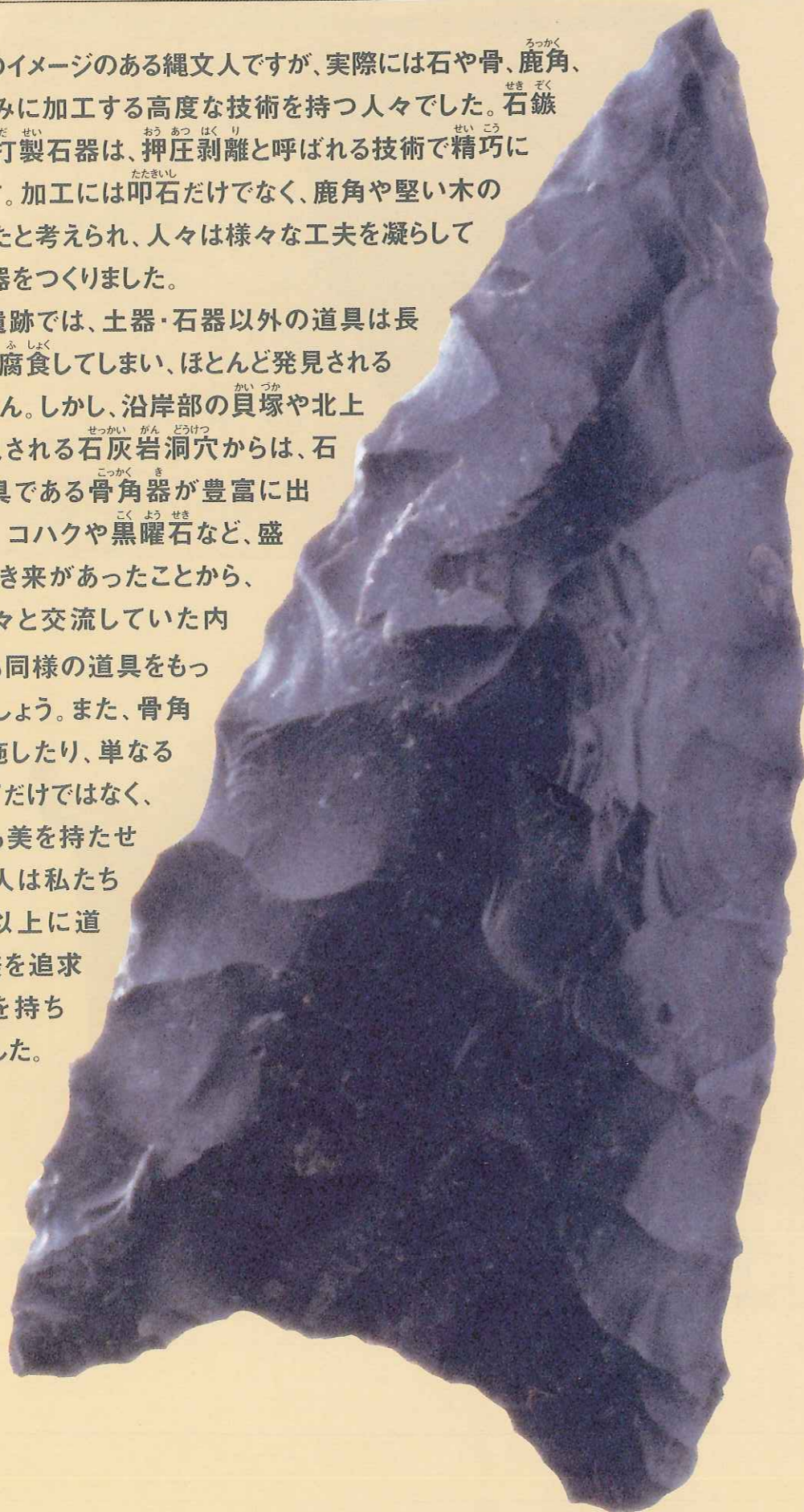


10の出土状況

道具と技術

「原始人」のイメージのある縄文人ですが、実際には石や骨、鹿角、植物などを巧みに加工する高度な技術を持つ人々でした。石鏃や石匙などの打製石器は、押圧剥離と呼ばれる技術で精巧に形づくられます。加工には叩石だけでなく、鹿角や堅い木の棒も使用されたと考えられ、人々は様々な工夫を凝らして目的とする石器をつくりました。

内陸部の遺跡では、土器・石器以外の道具は長い年月の間に腐食してしまい、ほとんど発見されることがありません。しかし、沿岸部の貝塚や北上山地から発見される石灰岩洞穴からは、石器以外の道具である骨角器が豊富に出土しています。コハクや黒曜石など、盛んにモノの行き来があったことから、沿岸部の人々と交流していた内陸部の人々も同様の道具をもっていたことでしょう。また、骨角器に彫刻を施したり、単なる「道具」としてだけではなく、機能の中にも美を持たせるなど、縄文人は私たちが想像する以上に道具に対して美を追求する芸術性を持ち合わせていました。



15 石器 石鏃1-9、石鏃10-12、石匙13・14、石鏃15-17、磨製石斧18-22
岩手県盛岡市繫V遺跡・大館町遺跡
縄文中期

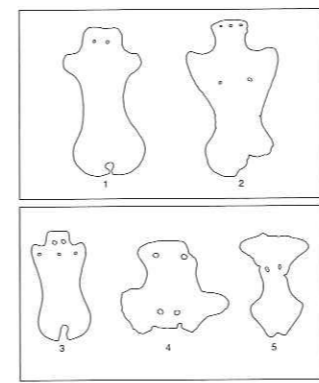
祈りの造形



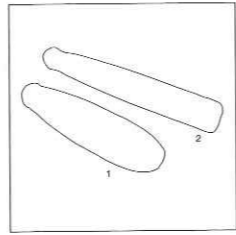
23 じんめんつき
人面付ミニチュア土器
おおだてちよう
岩手県盛岡市大館町遺跡
縄文中期 / 高4.5cm
(常設展示)

狩りや漁、植物採集といった自然の恵みに大きく依存する生活を送っていた縄文時代の人々は、あらゆる自然現象は神や精霊せいれいによって引き起こされると考えていました。そのため人々は、神や精霊すうはいを崇拝し、自然の猛威や疫病を畏れて数々の祭祀を行いました。

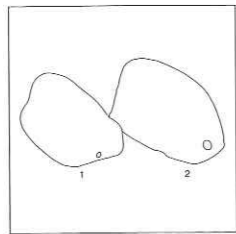
実体のないものへの畏れと願いは、土偶を代表とした土製品や石製品に反映されています。人の形をかたどった土偶は、縄文時代の数ある祭祀具の中で最も多く製作され、普遍的に利用された造形品です。土偶の様式や表現方法は、時期や地域によって様々な変遷をたどり、縄文時代中期には人を抽象化させた板状の土偶が作られました。ほぼ例外なく成人女性を表現し、また妊娠した女性を表すものも多く見られます。新しい生命を生み出す女性の神秘性に託し、安産や子孫の繁栄はんえい、自然の豊かな恵みを願う意味のほか、怪我や災害の身代わりとしての意味があったと考えられます。これらは、繁栄や再生を願う当時の人々の精神社会の一端をうかがい知る手がかりとなるでしょう。



24 ばんじょうどぐう
板状土偶
ししがらみ
岩手県雫石町塩ヶ森I遺跡
岩手県
縄文中期



25 石棒
 岩手県盛岡市柿ノ木平遺跡・繋V遺跡
 縄文中期 / 1: 長36.3cm・2: 長45.1cm



26 三角柱状石製品
 岩手県盛岡市繋V遺跡・川目C遺跡
 縄文中期 / 1: 幅9.0cm・2: 幅9.4cm



27 ヒスイ大珠
 岩手県宮古市上村貝塚
 宮古市教育委員会
 縄文中期 / 長7.1cm



28 ヒスイ大珠
 岩手県盛岡市川目C遺跡
 縄文中期 / 長8.5cm
 (常設展示)



29 ヒスイ大珠
 岩手県盛岡市川目C遺跡
 縄文中期 / 長5.7cm
 (常設展示)

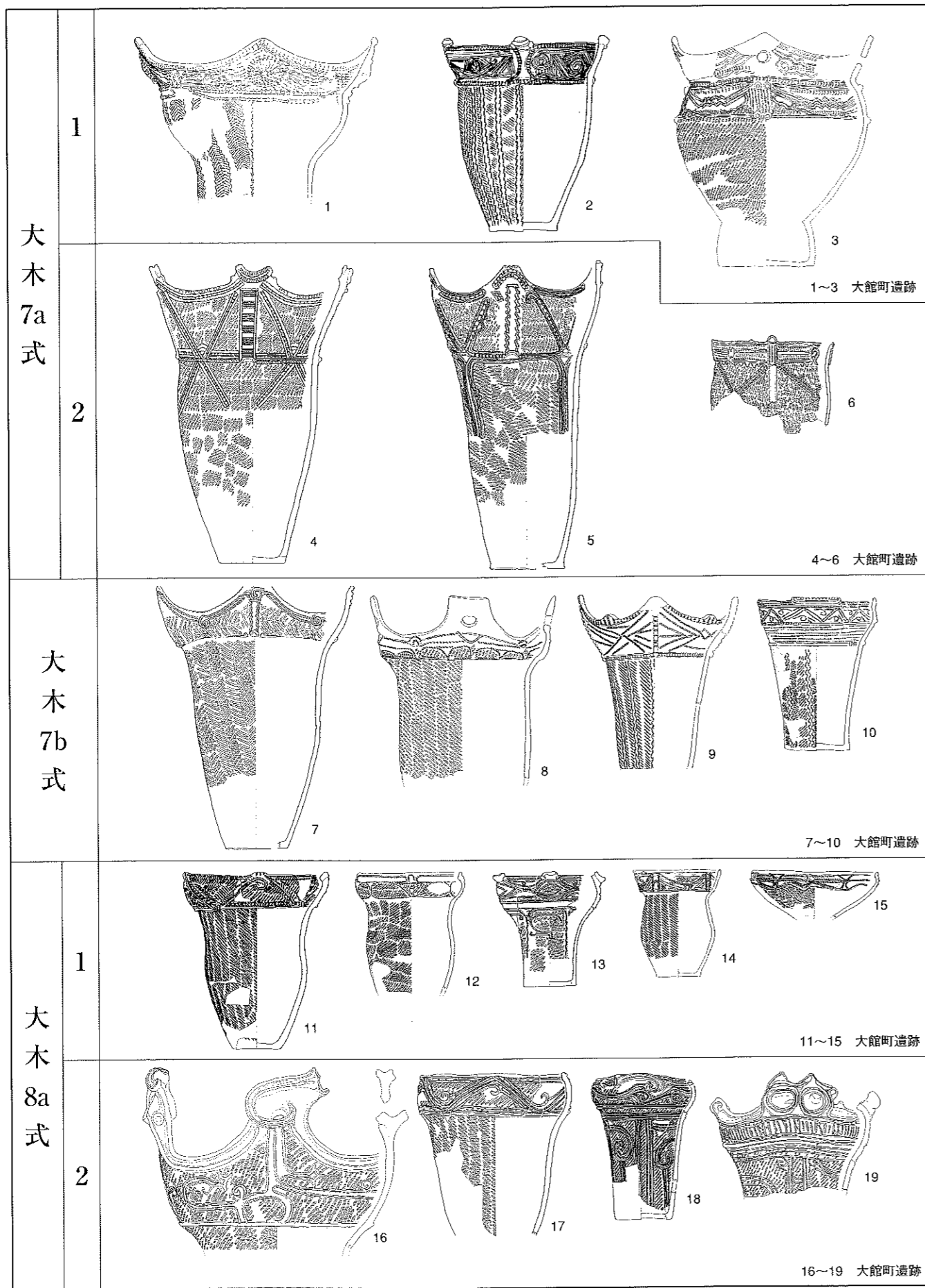


図2/土器変遷図

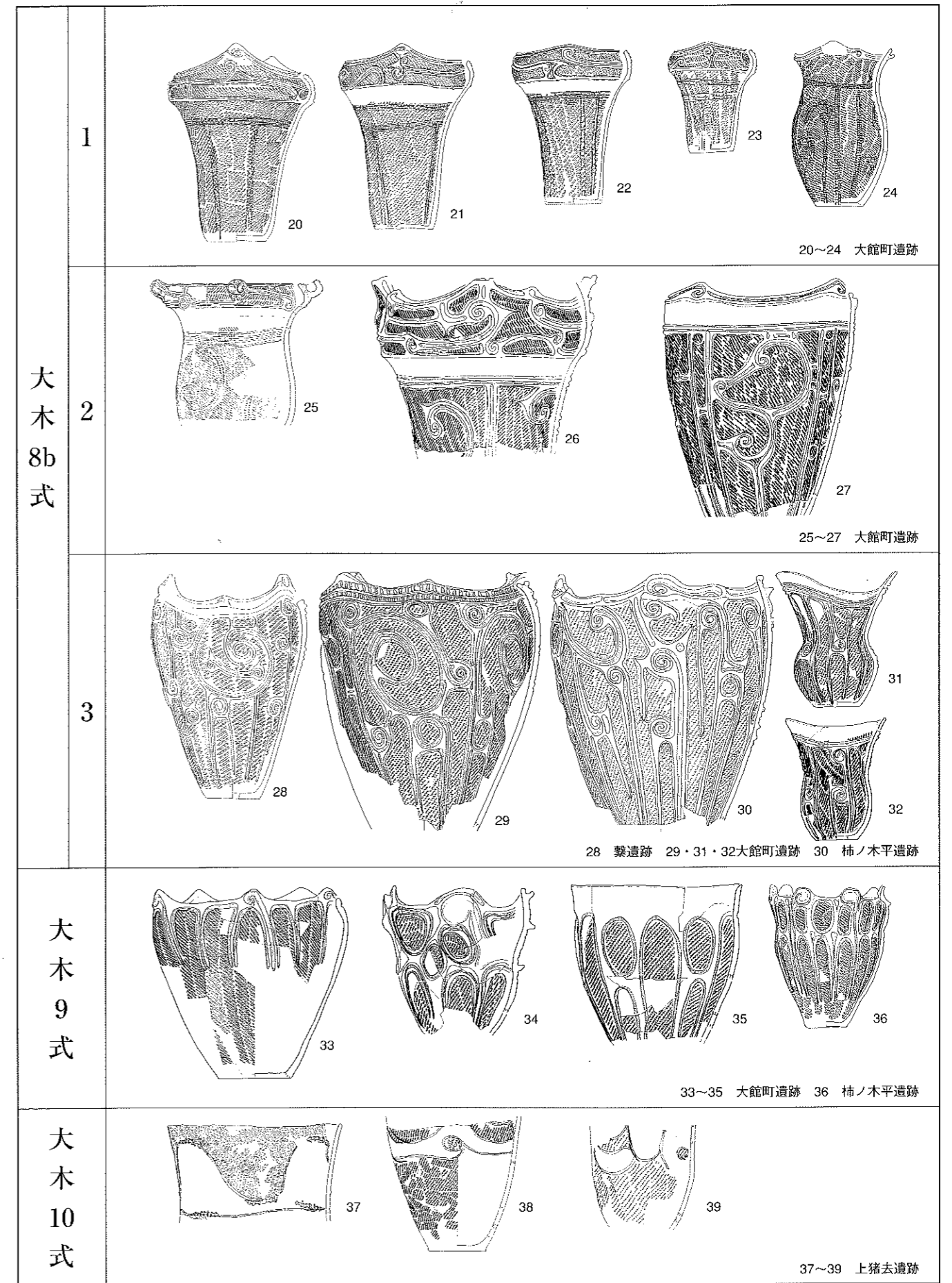


図3/土器変遷図